

(5) メロン

ア 各病害虫の防除

うどんこ病

菌核病

黒点根腐病

炭疽病

つる枯病

つる割病

べと病

ホモプシス根腐病

斑点細菌病

えそ斑点病

黄化病

黄化えそ病 (MYSV)

モザイク病 (CMV、PRSV)

モザイク病 (CGMMV)

アブラムシ類

ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ)

コナジラミ類

ミナミキイロアザミウマ

ハダニ類

ネコブセンチュウ類

トマトハモグリバエ

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

うどんこ病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
 - 2 薬剤のいずれかを発病初期から7～10日おきに病勢に応じて施用(散布)する。
- ※バンチョTF剤、モレスタン水和剤、ポリオキシンAL水溶剤は幼苗期や定植直後の使用を避ける。
※ベルコートフロアブルは、交配2～3日前から交配2週間後までの幼果の時期には、薬害を生じるおそれがあるので使用を避ける。また、若葉への散布や高温時の散布では、薬害を生じることがあるので注意する。
※くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。

菌核病

(耕種的・物理的防除)

- 1 施設内の保温、換気を図り、湿度をできるだけ下げる。
また、全面マルチ栽培し、子のう盤の発生を防ぐ。
- 2 菌核はこぼさないよう持ち去り、深く埋める。収穫後残さは処分する。地表面に残った菌核は10cm以上の深さに埋没する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を施用(散布)する。

黒点根腐病

(判断、防除に関する措置)

- 1 収穫直前に萎ちょうするのが特徴。
- 2 枯死株の根に特徴的な黒点を形成する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病ほ場ではメロンを連作しない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 土壌くん蒸剤で土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 薬剤を施用する。

炭疽病

(耕種的・物理的防除)

- 1 敷わらをする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病ごく初期から薬剤を施用(散布)。
※ジマンダイセン水和剤には展着剤を加用する。
※ジマンダイセン水和剤とボルドー液との7日以内の近接散布は、薬害を生じるおそれがあるので避ける。

つる枯病

(耕種的・物理的防除)

- 1 かん水パイプはマルチ下又は地中に配置するなど株元に水や泥がかからないように工夫する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 支柱消毒及び床土消毒をす([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 発病前から茎葉に丁寧に薬剤を施用(散布)する。
※ジマンダイセン水和剤には展着剤を加用する。
※ストロビーフロアブルは交配～幼果期までの散布では薬害を生じることがあるので使用を避ける。
※ジマンダイセン水和剤とボルドー液との7日以内の近接散布は、薬害を生じるおそれがあるので避ける。

※ベルクートフロアブルは、交配2～3日前から交配2週間後までの幼果の時期には、薬害を生じるおそれがあるので使用を避ける。また、若葉への散布や高温時の散布では、薬害を生じることがあるので注意する。

- 3 発病部位に薬剤を塗布する。

つる割病

(耕種的・物理的防除)

- 1 アールス・フェボリット(周年栽培品種)は抵抗性台木(大井、パーネット・ヒル・フェボリットなど)に接木をする。
- 2 地床栽培で発生した場合、市販の抵抗性品種を用いるか抵抗性台木(パートナー、健脚、US1号、US2号、大井など)を用いる。
- 3 露地メロンはかぼちやに接木する。
- 4 発病株は早期に発見し、抜き取って処分する。
- 5 収穫後茎葉を処分する。
- 6 石灰を施して土壌酸度を矯正する。
- 7 育苗は、専用ハウスで行うようにして、栽培ほ場から隔離する。
- 8 農機具などは土壌をよく洗い落とし、汚染土壌を未発病ほ場に移動させない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 支柱及び床土の消毒を行う([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 本ぼは土壌くん蒸剤で土壌消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

べと病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病前から天候の変化に応じて、薬剤を7～10日おきに、施用(散布)する。
- ※ジマンダイセン水和剤には展着剤を加用する。
※ストロビーフロアブルは交配～幼果期までの散布では薬害を生じることがあるので使用を避ける。
※ジマンダイセン水和剤とボルドー液との7日以内の近接散布は、薬害を生じるおそれがあるので避ける。

ホモプシス根腐病

(耕種的・物理的防除)

- 1 [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

斑点細菌病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から、薬剤を7日おきに施用(散布)する。
- ※ジマンダイセン水和剤には展着剤を加用する。
※銅剤と他剤との混用及び近接散布に注意する。
※無機銅(ボルドー)剤は幼苗期に薬害が生じやすいので中期以降に使用する。
※ジマンダイセン水和剤とボルドー液との7日以内の近接散布は、薬害を生じるおそれがあるので避ける。

えそ斑点病

(耕種的・物理的防除)

- 1 抵抗性品種を用いる。
- ※温室メロンの抵抗性品種にはソナタやアーネストなどがある。
- 2 種子は健全株から採種する。
 - 3 栽培資材は新しいものを用いるか、蒸気で消毒する。
 - 4 用土や堆肥は蒸気消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- ※土壌中の糸状菌オルピディウム菌が病原ウイルスMNSVを伝搬する。土壌伝染の他、病株の汁液により伝染する。
- 5 用水は汚染のないものを用いる。ため水をかん水に用いない。
 - 6 発病株は早めに抜き取り処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 本ぼは土壌くん蒸剤で土壌消毒をする([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

黄化病

(耕種的・物理的防除)

- 1 本項の[コナジラミ類の防除](#)に基づき防除を行う。

※本病はオンシツコナジラミによって媒介される

(薬剤防除)

- 1 本項の[コナジラミ類の防除](#)に基づき防除を行う。

黄化えそ病 (MYSV)

・[共通防除の章のトスポウイルス\(TSWV、INSV、IYSV、CSNV、MYSV\)による病害の防除の項](#)および[共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照するとともに、本項の[ミナミキイロアザミウマの防除](#)に基づき防除を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 育苗期及び定植後の施設ではミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。

モザイク病 (CMV、PRSV)

(耕種的・物理的防除)

- 1 苗床には発芽直後から防虫ネットを使って有翅アブラムシの侵入を防止する。
- 2 本場においてはシルバーポリマルチをする。ハウス、温室においても同様にし、天井、側面腰窓などに防虫ネットをはる。
- 3 つる整理の際に鋏や手によって伝染し、また収穫の際に鋏によっても伝染するので、発病株は作業の最後にまわす等十分注意する。

(薬剤防除)

- 1 アブラムシによって媒介されるため、本項の[アブラムシ類の防除](#)に基づき防除を行う。

モザイク病 (CGMMV)

(耕種的・物理的防除)

- 1 未消毒種子(台木、穂木とも)は、種子消毒する。
- 2 資材は新しいものを使用する。
- 3 病株は直ちに抜き去る。
- 4 3～4年の輪作をする。

アブラムシ類

(予防に関する措置)

- 1 うり科野菜などウイルス病が発生しやすい作物では、育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。
- 2 黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにつるし、有翅(し)成虫が飛来していないか確認する。
- 3 近紫外線除去フィルムは成虫の飛来を減らす効果があるので、これらのフィルムを施設の外張りやトンネルに使用する。
- 4 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。
- 5 マルチをする場合は、シルバーポリマルチなど忌避効果のあるものを使用する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、農薬安全使用に関する参考資料の章の[天敵等への化学農薬の影響の目安の項](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。
- 2 抵抗性の回避のため、異なった群から薬剤を選びローテーション散布を行う。発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。
- ※くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。

ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ)

(判断、防除に関する措置)

- 1 産卵は下葉に行われる。
- 2 支柱等をゆすると成虫が飛び立つので発見することができる。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- 2 発生初期に薬剤を施用(散布)する。

コナジラミ類

・[共通防除の章のコナジラミ類の防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 連作する場合には、作と作の間に施設内に植物が存在しない期間を設け、コナジラミ類がリレーされることを避ける。
- 2 育苗期の防除に努め、コナジラミ類が寄生していない苗を定植する。鉢物など、栽培に関係のない植物は、施設内に持ち込まない。
- 3 寄生範囲が広いので、ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 4 夏期には露地においても発生が多くなるため、秋期より栽培(定植)の始まる作型では、施設内への成虫の侵入防止対策を徹底する。0.4mm目以下の防虫ネット、紫外線除去フィルム、光反射資材によるマルチ等を活用する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 特にタバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しやすいので、予防策を基本とした総合防除を行う。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等を行う。
- 3 成虫密度の低下のため、粘着シート等を設置する。施設で発生予察のために黄色粘着テープを使用する場合は、侵入防止を徹底したうえで、施設の出入口や側窓付近に張り、定期的に交換する。
- 4 本圃において化学的防除を行う際は、早期発見、早期防除に重点を置き、薬剤効果に差があるので種の区別を的確に行う。
- 5 薬剤散布を行うに当たっては、葉裏に寄生している幼虫、蛹にも必ず薬剤がかかるよう丁寧に十分な量を散布する。さらに、薬剤が株全体によく到達するよう下葉の処分を早期に行うなど工夫する。
- 6 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 7 施設栽培においては、栽培終了後に作物上に寄生したコナジラミの施設外への逃亡・拡散を防止するため、収穫後の残さはキルパーの処理([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照)や施設の密閉処理により、枯死、乾燥させた上で処分する。[農薬登録情報](#)

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※コナジラミ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- 2 気門封鎖剤を散布する。
 - 3 キルパーを用いた病害虫まん延防止([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照) [農薬登録情報](#)
 - 4 薬剤抵抗性の発達を回避するため、異なる系統から薬剤を選びローテーション散布を行う。

ミナミキイロアザミウマ

・[共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(物理的・耕種的防除)

- 1 施設内への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネットを展張する。育苗期の被覆も有効である。ほぼ完全に侵入を阻止するには、目合い0.4mm以下の防虫ネットが必要である。
- 2 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 3 粘着テープにより成虫を誘殺する。本種は特に青色に誘引される。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。

- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※ミナミキイロアザミウマの生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用方法の項](#)を参照する。
 - 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

ハダニ類

- (薬剤防除) [農薬登録情報](#)
- 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※ハダニ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- 気門封鎖剤を散布する。
 - くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用方法の項](#)を参照する。
 - 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

ネコブセンチュウ類

- ・[共通防除の章の土壌線虫の防除の項](#)を参照する。

- (薬剤防除) [農薬登録情報](#)
- 発生が予想される場合には、薬剤を施用する。

トマトハモグリバエ

- ・[共通防除の章のハモグリバエ類の防除の項](#)を参照する。

- (物理的・耕種的防除)
- 苗を導入する場合、食害痕に注意し、寄生された苗を持ち込まない。
- ※うり科作物で多く発生する。
- 施設の開口部に寒冷紗等のネットを張り、成虫の侵入を防ぐ。
 - ほ場周辺の除草に努める。
 - 摘葉や収穫残さは土中に埋めるなどの処理をする。
 - 夏期の施設栽培では、収穫終了後施設を密閉し、太陽熱消毒を行い、蛹を死滅させる。

- (薬剤防除) [農薬登録情報](#)
- 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。